

「たけくらべ」自筆草稿を開く

—樋口一葉〈書くこと〉の領域—

トマツ イズミ
戸松 泉

はじめに

国文学研究資料館創立40周年を記念して、「たけくらべ」自筆原稿が展示されるということで、それに因んだ講演をと依頼されました。準備のために改めて「たけくらべ」を自筆清書原稿（複製版）で読み直してみました。そこにはデジタル社会の現代を生きる私たちには、もはや回帰することが難しい世界が広がっていました。一葉は、書き上げた「たけくらべ」を読み返しては、また筆を執りして、何度も書き直しています。気の遠くなるような〈書くこと〉の営みを実感いたします。私も、卒業論文や修士論文は、原稿用紙を使った世代ですが、もう二度と手書きで清書する作業はできないのではないかと思います。

さて、「たけくらべ」という小説の物語内容については、改めて説明するまでもないでしょう。江戸時代から続く新吉原遊郭に隣接する街、通称大音寺前に住む子供たちを描いた小説です。時代は、「たけくらべ」が発表された当時、明治20年代後半です。表町組のリーダー正太郎は最年少の13歳、横町組のリーダー長吉は最年長の16歳、この敵対するグループ夫々のなかに、大黒屋の美登利14歳と龍華寺の跡取り息子の信如15歳がいます。時に二人の初恋を描いた小説とも読まれてきました。その構図は、シェイクスピアの「ロミオとジュリエット」にも似ておりますし、下町を舞台にしたということではミュージカル「ウェストサイドストーリー」を想起いたします。しかし、「たけくらべ」の恋は未成立のままに終わり、子どもたちそれぞれの「大人の時間」への

歩みが暗示されていきます。

この「たけくらべ」の原稿にまつわる問題については、私は、以前（1999年）に論文を発表しました。流通する本文の問題を提起したものです。その時に論じ残した課題は多々あるものの、私の研究作業は必ずしも進展しているわけではありません。その理由は、全ての草稿をいまだ実際に手にして見る事ができていないことがあります。したがって、新しい研究成果をここで、お話しするわけではありません。しかし、今回、再度「たけくらべ」について考える機会に恵まれましたことを感謝しております。なぜなら、現在流通している「たけくらべ」本文の問題が、その後の研究動向に照らしても、依然として存在していると、改めて確認できたからです。後世に残すべき、「たけくらべ」本文はどうあるべきなのか。もう一度、考えてみたいと思います。（なお、以下の文体は、書き言葉のそれにいたします。）

一. 「たけくらべ」草稿群残存の奇跡

(一) 残された「たけくらべ」草稿とその所在

残された一葉の草稿（ここでは手で書いたものすべてを指す）は、「数千枚」とも言われているように、近代作家のなかでも、よく保存されている。その理由については、いろいろと考察されているが、妹・邦子の功績が大きいことは確かであろう。身近にいるものが、その辛苦し執筆する作家の姿を目の当たりにして、たとえ反故紙といえども捨てられなかったのである。こうしたことは、一葉に限らず、芥川や太宰など他の作家にもあった。また、一葉の時代には、紙そのものが貴重であったということもあり、使った紙を再利用することもしばしばであった。残された草稿を見ると、筆ならしのような線が、縦横に上書きされているものが、少なからず残っている。あるいは結局作品として完成を見ずに終わったものも、大切に保管されたようである。

ここでは、まず、「たけくらべ」がどのように発表されたか、その際にどれだけの草稿が残され保存されたかを、できる範囲で把握しておきたい。一葉が

発表した小説は、未完の「裏紫」（一葉は「うらむらさき」と表記）を含めて22作である。そのうち、清書原稿の現存が確認されているのは、今のところ「たけくらべ」だけである（「やみ夜」が一部残存?）。その他は、手許に残った下書き稿や、完成を見なかった「未定稿」が保存されている。本資料館に今回展示された、「たけくらべ」自筆原稿75枚がいかに貴重な資料であるか、この点からも理解できる。なお、「たけくらべ」に関する草稿の所在については、本稿末尾〔参照資料①〕の図に簡単にまとめている。

（二）二つの清書原稿

さて、「たけくらべ」の初出は『文学界』という同人誌である。明治28年1月から翌年の1月まで、7回にわたって断続的に掲載された（雑誌の発行日は、2月28日を除いて月末の30日）。この時の一葉は文壇での注目度はあまり高くはなかった。が、幸いなことに、この初出時の清書原稿も一部ではあるが残っている。もっとも物語がダイナミックに動き出す後半（十一）章以降は、ほぼ完全なかたちで残っている（4回目掲載の（九）（十）に関しては部分的に残存。ただ、所蔵機関は複数にわたる）。これも奇跡である。

そして、連載終了後、一葉は博文館の大橋乙羽の依頼により、同社の文芸雑誌『文藝倶楽部』（明治29・4）に一括再掲載するために、再度原稿化を始める。当時の出版事情を考えると、原稿買い取り制度であったため、モノとしての原稿を、一葉は用意する必要があったのである。改めて「たけくらべ」を書くために原稿用紙に向かった一葉は、筆と墨で、一桁一桁に文字を綴っていった。ルビは朱筆で、丁寧につけられている。二つの清書原稿を並べて読むと、読むたびに新たな読者、新たな書き手となっている一葉を発見する。「たけくらべ」の本文が「流動的」といわれるゆえんである。この時一葉のなかで起こっていたできごとを、誰しもさまざまに想像したくなるであろう。

(三) 「雛鶏」と題する草稿、或いは「雛鶏」から「たけくらべ」へ

「たけくらべ」には、その他「未定稿」と呼ばれている、下書き原稿もかなり残されている。こちらは、最近、山梨県立文学館所蔵の草稿が、野口碩氏によって整理が進められた。しかし、その他は、所在が分散していることもあって、研究資料として誰もが使うためには、今少し時間がかかると思われる。当初は、「雛鶏」と題されていた作品が、どこまで書き進められ、いつの時点で「たけくらべ」と改題されたのか、その生成の過程が問題になっている。

野口氏は、「雛鶏」と題する作品は、ちょうど『文学界』の第一回の掲載分、(一)から(三)章にあたる、冒頭部分のみとする。が、その新しい検証は始まったばかりである。全ての草稿が、デジタル画像などで多くの人の目に触れる日が来ることを願っている。

二. 「たけくらべ」流通する本文

現在、流通している「たけくらべ」の本文は、『文藝倶楽部』に再掲載された時のものである。そして、それが当たり前のように流通しているのが現状である。

しかし、近年、岩波書店が出版した「新日本古典文学大系 明治編」の24巻『樋口一葉集』(2001・10刊)は、「最初の発表紙誌」の本文を底本に採用したため、「たけくらべ」は、初出『文学界』掲載本文となっている。一葉が誤記した、最終回の章番号が修正されたり、また、残存する初出時の原稿と照らすとわかる、明らかな写しミス・植字ミスがそのままに残ったりなど、問題がないわけではない。この最終回の清書原稿は、10年余り前に古書店のオークションに出た。無野の「半紙に記載された9枚」の原稿は、掲載の際、編集部によって原稿用紙に写し直されたのである。その時起こったミスが、自筆原稿の出現によって明らかになったにも関わらず、なんの注記もなく放置されたのである。脚注・補注をつけた、この種の書籍の性格を考えると、後世に残すべき作品の本文としてふさわしいのかという疑問もわいてくる。ただ、誰もが、

二つの「たけくらべ」を読み比べる契機になることは期待できるだろう。

また、現在もっとも権威のある、筑摩版『樋口一葉全集』（全4巻6冊、昭和49・3～平成6・6刊）を編集された野口碩氏は、本全集編纂時から繰り返し、『文藝倶楽部』再掲載の時の原稿として、初出の際の「下書き原稿」が一部使われたことを指摘している。（十三）以下（十六）章の大尾に至るまでのところである。確かに原稿冒頭には「たけくらべ」の題字が消された跡が、そして「一葉」という署名が残っている（本稿末尾の当該原稿を参照。原稿上欄「154」と記載したもの）。いわば、「たけくらべ」のクライマックス部分である。野口氏は、たとえば、次のような言い方で、近年も繰り返されている。

「一葉は『文学界』に掲載された本文をそのまま転載させることはせず、その初出本文を書き直して原稿を提出することにした。だが、手許には掲載誌が揃っていなかったため、一部分を初出本文を清書する際に不用になった未定稿を活用して補い、その手許にない部分の掲載号を「借りて、未定稿本文が『文学界』本文と相違する部分を照合しながら書き改めた」「（十三）以降は未定稿を活用して」「この部分の書き込みや消しは、未定稿本文を『文学界』本文に一致させるために行ったもので、初出本文を改めようとしたものではない。それでも未定稿の本文形態がそのまま残った部分があり、それが初出本文と再掲本文との最も重要な相違になっている」（山梨県立文学館監修「完全複製 直筆たけくらべ 樋口一葉」2005・3、二玄社「別冊」の解説。なお、引用文中の傍線は筆者。以下同様）

あるいは、また次のような説明をされる。

「断続的に『文学界』に掲載され、その完結を見て大橋乙羽の依頼により、初出テキストの不備を補い、漢字表記や文字遣いなどの多くを改め、未定稿を一部活用したためテキストの変更も生じた再掲本文が作成され、明治29年4月発行『文藝倶楽部』第二巻第五編に一括掲載された」（「樋口一葉「たけくらべ」ほか未定稿資料など 付〈写真版〉」山梨県立文学館「資料と研究」第12輯 2007・3）

すなわち、現在流通している本文の（十三）章以降（17枚の原稿）は、「文学界」発表以前に書かれたものである、との指摘である。しかも、「（十三）（十四）」「この二章はあたかも連続するが如く一気に書かれた。しかも下書きでは（十六）まで連続して書かれていた」とも指摘する。あと2回の連載を残した時点で、一葉は一旦末尾まで、原稿を一気に書いたとするのである。その上で、再度、連載のための清書をそれぞれに行ったとする。そして、その二つの本文には、「重要な相違」「変更」があったことを認めている。

こうした文献学的な判断を尊重するとしても、この二つの本文に対する評価がなされていないことに、私は戸惑いを覚えるのである。どちらの本文を一般の読者に提供すべきなのか？「たけくらべ」本文の問題は、依然として未解決なのである。

たとえ再掲載に向けて、「下書き稿」を利用して書いたとしても、またその「下書き稿」を『文学界』本文を参照しつつ修正したとしても、一葉が、再掲載の時に、新たに「たけくらべ」の原稿を作成したことは確かである。この問題については、私自身は、原稿それ自体からの判断は難しいと考えている。仮に野口氏の説明を全面的に認めるにしても、（もっとも、一葉が「未定稿を活用」したことが、「手許には掲載誌が揃っていなかったため」という物理的な事情によるという理由は納得できないのだが）、実のところ、野口氏のような一葉研究の第一人者の口から、こうした発言がなされるゆえに、「たけくらべ」の本文問題が浮上すると、私は思うのである。多くの一葉研究者は、何の疑問も抱かず『文藝倶楽部』掲載の「たけくらべ」を読んでいるのが実情だろう。

三. 二つの「たけくらべ」原稿を読む

— 初出「文学界」本文と再掲「文芸倶楽部」本文と —

残された二つの「たけくらべ」の原稿を読み比べると、漢字や仮名の表記の違い、助詞の使い方、句読点の打ち方など、微細な違いは数限りなくあり、確

かに、既に指摘されているように、臨書したというよりも、妹の邦子に読んでもらい、傍らで一葉が自由に筆を走らせたことを想像させる。どちらも清書原稿といってよいほどの美しさである。加筆・削除の跡はきわめて少ない。しかし、後半に顕著になる、一見微細な違いは、解釈に関わって見逃せない。野口氏も、この点は認めているわけで、いずれにしろ、私たち読者にできることは、この二つの「たけくらべ」を読み比べてみることである。

後半の差異を考える前に、ここで、『文学界』本文から『文藝倶楽部』本文へと、約一年半ほどの時間をかけて書かれたことによって、「たけくらべ」のなかで起こったいくつかの現象を列挙しておこうと思う。実のところ「たけくらべ」の〈語り手〉を読むことに着目していくと、その「現象」は解釈上の問題としてあるに過ぎないのである。すなわち、〈語り手〉の変容それ自体を読むことに他ならないできごととしてあることがわかる。その前に、発表過程の概要を押さえておこう。

(一) 一年間、断続的に連載された「たけくらべ」

明治28年1月から『文学界』(25号)の掲載が始まった「たけくらべ」は、3月号(27号)の第3回の連載が終わったところで、5か月ほどの空白期間がはさまっている。8月に再び連載を開始するものの、その後の掲載は3か月後の11月(35号)になる(この2度にわたる「たけくらべ」の停滞は、〈語り手〉の、信如という作中人物の把握に関わっており、この点について草稿を介して解明することが目下の私の課題である)。一方、この間に、一葉は「にごりえ」(明治28・9『文藝倶楽部』)・「十三夜」(明治28・12『文藝倶楽部』、旧稿「やみ夜」を同時掲載)・「この子」(明治29・1『日本乃家庭』)・「わかれ道」(明治29・1・4『国民之友』)・「裏紫」(明治29・2『新文壇』)と矢継ぎ早に小説を、それも一つひとつが充実した、一葉らしい作品を書き下ろしていく。その合間を縫うようにして、「たけくらべ」を執筆していたのである。一気に末尾まで書いたのはいつの時点であったのか、非常に気になるところである。

さて「たけくらべ」を読んでいると、物語の節目ともいうべき箇所につつかる。それまで、子どもたちの日常を、季節の推移とともに、淡々と語っていた〈語り手〉が、思わず身を乗り出し、目を凝らして物語の行方をみつめ始めるのである。(十二)(十三)章の、時雨の降る早朝、使いにでた信如が、美登利の住む大黒屋の寮の門前で下駄の鼻緒を切る場面である。

この土地(大音寺前という吉原遊郭に隣接する街)に外部から入ってきたよそ者のな、傍観者的な視線で、この街の子どもたちを、もの珍しく、生き活きと語り続けてきた〈語り手〉が、後半に至って変容し始めるのである。作中人物、殊に将来娼妓となる運命を背負った美登利への共振を強めていく。その意味でも、(十三)章以降という、二つの清書原稿が残る箇所は、さまざまな問題を提起して重要である。

(二) (十二) 章の末尾、「平常の美登利」とは異なる美登利の出現

「たけくらべ」(十二)から(十三)章への間には、一か月の執筆期間があく。大黒屋の寮の門前で信如が下駄の鼻緒を切り、困惑する場面を語ったところである。ここでは、〈語り手〉の美登利そして信如へ向けるまなざしに揺らぎが起こっていく。

その揺らぎはまず美登利によってもたらされる。〈語り手〉は、ここまでおきゃんで活発で、子供仲間の女王様として君臨してきた美登利に「哀れ」というまなざしを投げかけてきた。吉原遊郭で権勢をふるう姉の大巻をお手本と考え、将来の自分を何の疑問ももたずそこに重ねて生きてきた美登利の倨傲と無知を知るからである。しかし、この朝の美登利は違っていた。信如に対して、うじうじとやるせない思慕をあらわにする、ごくふつうの思春期の少女であった。「平常の美登利ならば」として、美登利から発せられなかった信如への憎まれ口を延々と記しながら、結局「平常の美登利のさまにては無かりき」と締めくくる。このいわば他者として迫ってきた美登利の発見が、一か月後に、(十三)章を書き始める際に、再び信如を語り直すことへと〈語り手〉を促す

のである。

(三) (十二) 章と (十三) 賞と——冒頭の「重複」あるいは「改稿」問題——

(十二) (十三) 章冒頭の「重複」問題は、これまでさまざまな解釈を呼んできた。「読者の記憶をたすけようとしたため」「必ずしも重複とばかり受け取ることができないのではなかろうか」(和田芳恵)「冒頭の数行が前章の内容と重複している」(青木一男)「この段落は、前章を要約した叙述になっている」(中野博雄)「一つの出来事を、信如、美登利の双方から描くための工夫」(青木稔弥)「改めて、腰を据えて、末尾までの明確な構想を立てた」(十二) 章の方向を正し、表現不足を補った」(橋本威)「信如の視点と美登利の視点から交互に、しかも同一場面の重複も厭わないという語り方は、あたかも稀有の時間をいとおしみビデオ映像を低速操作して、繰り返しその場を見るような印象を与えている」(関礼子) などである。作家の問題に還元する読みから、物語行為論まで、読み方それ自体に、時代の研究手法を顕現している興味深い問題でもある。

〈語り手〉は、美登利の信如への気持ちを知ったために、改めて信如の心を探ろうとする。そして、前章との矛盾をおかしてまでも改稿する。すなわち信如が美登利に気がつく箇所の書き換えがなされる。(十二) 章では、「信如もふつと振り返りて、此れも無言に脇を流るゝ冷汗、跣足に成りて逃げ出したき思ひなり」と振り返って確認している。が、(十三) 章では、「憂き事さまへに何うも堪へられぬ思ひの有しに、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、顧みねども其人と思ふに、わなへと慄へて顔の色も変るべく」と、背中で美登利を意識している信如が示されている。

(四) 消された美登利

この(十三) 章には、さらに「掲載本文のいずれにも存在しない独自の文形」(全集「補注」野口碩氏)の問題がある。この章で、信如との断絶を意識

した美登利が定着する、と私には思われる（末尾の〔参照資料②〕原稿 155、156）。もし野口氏が言うように、再掲載の自筆原稿に「下書き原稿」を使ったとするならば、その段階では、「母親の呼声」に応じて家にもどる美登利の「悄悄と入る」姿が構想されたことになる。結局、「ゑゝ、何ぞいの未練くさい、思はく耻かしと身をかへして」かたかたと下駄をならして勢いよく帰っていく美登利が描かれる。この美登利は、自分の思いに応えてくれない信如との断絶を意識した強い美登利である。

亀井秀雄氏（『11 女の語る物語』『明治文学史』2000・3、岩波書店）は、この部分の書き換えについて、つぎのような解釈を示している。

「多分一葉はその芝居がかった表現を繰り返すことにためらいを覚えたのでしょう、そこで、これを削り、「飛石づたひ悄悄と入るを」と、うち萎れた美登利のイメージに変えてみたのだらうと思われます」（再び変えたことに対する詳しい言及は亀井氏の論文にはない＝戸松注）。

また、亀井氏は、そのことに関連してつぎのような指摘もしている。この後の三の酉の日の美登利の嘆きようについて語った部分である（次章で示す、「(十五) 章に見る「差異」」の②を参照）。

「前者（『文学界』本文＝戸松注）の美登利は自分から部屋に閉じこもって、人を寄せつけまいとする意志を抱いていたのに対して、後者（『文藝倶楽部』＝戸松注）の美登利は「成事ならば」（できることならば）部屋にこもって、誰れからも言葉を掛けられたくないと、受け身の発想に変わっていることが分かります。／その意味で一葉は、清書による再解釈を通して、勝ち気な美登利を〈女の子〉らしい性格に変えたい志向を喚び起こされたのではないかと推測できます」

二つの引用に見るように、亀井氏は、解釈学的循環構造のなかで、結局、勝ち気な美登利から〈女の子〉らしい性格へと、一葉は変えたかたと結論づけている。この箇所解釈については、亀井氏とは異なる解釈を私は提示しているが、なによりここでの引用によって確認したかったのは、亀井氏が再掲載時

の原稿は、初出以後に書かれたことを前提にしていることである。亀井氏に限らず、多くの研究者は、再掲載原稿を見ても、それが「下書き」などとは思わないのが現状なのである。それくらい、原稿は美しい。

一括再掲載という事態をどう考えるのか。それも連載最終回から時をおかずに、一葉は入稿している。再び原稿を作成する、この時の一葉は、「たけくらべ」を^よ通^く読^する読者へと変貌していったはずである。その意味で、私は、再掲載本文は、たとえ下書き稿を使っても、その時の書き手一葉が確実にいたと考えたい。本文全体の統一感と、〈語り手〉の美登利への共振の思いは遥かに再掲載本文に強く表れているようである。そのことを、以下で確認してみよう。

なお、ここでは詳述しないが、(十三)章末尾、美登利が家に戻ったあと、その場に取り残された信如の姿は、あるいは信如のセクシャリティ（異性に対する意識）は、廓からの朝帰りの長吉の出現によって、対比的に語られることになる。ただここでは、信如の美登利への志向がかき消されていくことだけを、確認しておこう。「たけくらべ」のなかで、信如の美登利への思いは、結局語られることはなかった。「たけくらべ」の、美登利と信如の物語は雲散霧消し、物語は美登利のカタストロフィーへと向かうのである。廓のなかへと招きよせられた美登利は、娼妓という、それまでとは異なる生を「たけくらべ」の時間のなかで生きることになる。

四. 「たけくらべ」本文・後半部の揺らぎ

—「三の酉の日」の終息から、小説大尾への「時間」を考える—

(十四)章以降(十六)の前半の小説内時間は三の酉の日の昼過ぎから夕方までである。この日、美登利は、「初々しき〈大〉島田〔髻に〕〈結び綿のやうに〉絞りばなしふさ〰と〔結び綿のやうに〕〈かけて〉、鼈甲のさし込、総つきの花かんざしひらめかせし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやう」(引用文中の〔 〕は削除を、〈 〉は加筆を表す)な姿で、番頭新造のお妻に付き添われて、廓内から出てくる。美登利を捜していた正太とそこで出会い、

一緒に家に帰ってきた美登利は、正太のいることも忘れてうつ伏し臥して嘆き悲しむのである。美登利の身になにが起こったのか、これまで議論が絶えなかった箇所である。また、正太がどううけとめたかが問われるところでもある。

原稿を見ると、このあたりから『文学界』本文と『文芸倶楽部』本文との差異が顕著になってくる。清書原稿は初出『文学界』掲載時のものを天理大学附属天理図書館が(十三)(十四)の全9枚を所蔵し、(十五)(十六)(実は、(十三)(十四)と一葉が誤記したもの。個人蔵 全9枚)は、現在、日本近代文学館に寄託されている。

(一) (十四) 章にみる「差異」——三の酉の日の美登利へ——

以下、ここでは、(a) 初出『文学界』稿本・(b)『文芸倶楽部』稿本の本文を併記した(なお、傍線は筆者)。まず次に掲げた、①から②は、酉の市には一緒にと約束していた美登利を捜す正太が、汁粉を売る団子屋の背高(頓馬)と会話を交わす場面であり、③は美登利の台詞を含むものである。いずれも微妙に差異があることがわかる。読んでみると、(a)は、誰の誰に向けた台詞かわかりにくくなることがしばしばあるのだが、発話者を明示して文脈上明確なのは(b)の方である。②の(b)「頓馬を現はすに」は、正太の美登利への好意を知っているはずなのに、背高(頓馬)が、うっかり傷つけるような間抜けなことを漏らしたことを含意していよう。したがって「洒落くさい事を言つて居らあ」と正太の強い反発を招くのである。③は、美登利の台詞が、お妻にかけたものか、正太にかけた呼び声か両様にとれてしまうのが(a)である。

① (a) 大卷さんより猶美いや、だが彼の子も華魁になるのでは可愛さうだと下を向いて言ふに

(b) 大卷さんより猶美いや、だけれど彼の子も華魁に成るのでは可憐さうだと下を向いて正太の答ふるに

② (a) お金をこしらへるのだから、夫れを持つて買ひに行くのだと頓

馬のいふに、洒落くさいなあ、左様すればお前はきつと振られるよ。

(b) お金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らあ左うすればお前はきつと振られるよ。

- ③ (a) 彼方 (かなた) は正太さんとして走り寄り、
(b) 彼方 (こなた) は正太さんかとして走り寄り、

つぎに挙げた④は、(十四)章の末尾、美登利が人目を厭うさまを語ったところである。「顔に袖屏風」では美登利の沈鬱な思いは伝わらない。自分の身に起きたことへの、精神的に深いところでの思いを示すのは (b) だろう。より近代的な表現とってよいか。

- ④ (a) 私は嫌でならないとて顔に袖屏風、往來を恥ぢぬ。
(b) 私は厭やでしようが無い、とさし俯向きて往來を恥ぢぬ。

このように、この章では、作中人物の交わす会話部分の「差異」が多く見られるのであり、文脈上のわかりやすさ、生き活きとした会話のさまは (b) に軍配をあげられよう。

(二) (十五) 章に見る「差異」

「憂く恥かしく、つゝましき事身にあれば」で始まる (十五) 章は、正太とともに自宅に帰ってきた直後の、美登利の愁嘆場を語ったところである。帰ってくるなり、正太が傍らにいるのも忘れて、うつ伏し臥して嘆き悲しむ。正太は、昨日と異なる美登利に驚き、戸惑いを隠せない。いくつか「差異」を挙げてみよう。なお、この部分に顕れた原稿の加筆・削除の跡を以下のなかに記した。〔 〕は削除を、〈 〉は加筆を表す。なお () はルビを示す。以下同様。

- ① (a) 帯と上着をぬぎ捨てしばかりうつ伏し臥して何とも言はず。
 (b) 帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。
- ② (a) すべて昨日の美登利が身に覚えなかりし思ひをまうけて、唯々
(たゞ〜) ものゝ恥かしさ言ふばかりなく、薄くらき部屋の中
に誰れとて詞をかけもせず
 (b) すべて昨日の美登利の身に覚えなかりし思ひをまうけて物の恥
かしさ言ふばかりなく、成事(なること)ならば薄暗き部屋のう
ちに誰れとて言葉をかけもせず
- ③ (a) 正太は何故と得ぞとき難く烟の中にあるやうにて、お前は何う
 しても変てこだよ、其様な事を言ふてへ筈は無いでは無いか、可
笑しい人だな、
 (b) 正太は何故とも得ぞ解きがたく、〈烟のうちにあるやうにて〉
 お前は何う志ても変てこだよ、其様な事を言ふ筈は無いに、可怪
しい人だね、
- ④ (a) 風呂場に湯かげん見る母親
 (b) 風呂場に加減見る母親

ここで、注目したいのは、②である。(a)の美登利は、自分の身に起こったことの恥かしさに、ただただ驚き動揺するばかりである。(b)は、その恥かしさを受け止めつつ、それ以前の自分に回帰することの難しいことを知っている。その上で、ひたすら時間が止まることを願っているのである。身体的なところで恥かしさに遭遇している(a)の美登利と、より精神的なところで「大人」になることの辛さを考えている(b)の美登利と、微妙に異なっているようである。強いられた運命を、痛ましいほどに甘受しているのは(b)の美登利である。「湯かげん」を見る母親の姿は、あまりに露骨ではないだろうか。

(三) (十六) 章に見る「差異」

美登利に冷たくされた正太は「真一文字」に駆けて出て、筆やへ飛び込む。そこでは、今日の酉の市で大頭の店を出し、もうけを手にした三五郎が弟妹をひきつけて上機嫌であった。この部分を読んでいてまず気がつくのは、呼称である。以下に並べた「差異」の② (a) にみるように、三五郎が「正太さん」と呼んでいるのである。他にもう一箇所「正太さん」が出てくる。あと一か所は「正さん」である。(b) は、三か所とも「正さん」と呼ぶ。いくら親の借金のため頭があがらないとはいえ、年長の三五郎が「正太さん」と呼ぶのには、違和感を覚えないだろうか。①の正太の三五郎に対してきつく反発する台詞も(b)の方がわかりやすく、最前の美登利のふるまいを思い出しては動揺する正太を一層感じさせるのである。③④では、信如が「坊さん学校」への入学が決まったことが知らされ、修行の道を歩き始めることが暗示される。その出発の時の表現が違うことに注意してほしい。三の酉の日は、この子どもたちにとって、大人の世界へ歩を進めることが決まった日でもあった。正太が、その日のできごとを反芻し、いつまでも筆やに居続けるのが④ (b) である。

- ① (a) 馬鹿を言へ、夫れどころでは無いと鬱ぐに、
(b) 馬鹿をいへ手前に奢つて貰う己れでは無いは、黙つて居ろ生意氣は吐くなど何時になく荒らい事を言つて、夫れどころでは無いとて鬱ぐに、
- ② (a) 正太さん 膽玉をしめて懸りねへ
(b) 正さん 膽ッ玉をしつかりして懸りねへ
- ③ (a) 信さんは二三日すると何処のか坊さん学校へ這入るのだと
(b) 信さんは最う近々何処かの坊さん学校へ這入るのだとさ
- ④ (a) 正太は例の歌も出ず、大路の往来は夥だしけれど心淋しければ賑やかなりとも思はれで、火ともし過ぎには筆屋の店にも影の見えず成りぬ。

(b) 正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥たゞしきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、〔日?〕〈火〉ともし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市目茶〔に成りて〕〈〜〉に 此処も彼処も怪しき事成りき。

さて、三の酉が過ぎて後の数日のことが語られたのが稿本末尾の30行である。以下にその部分の「差異」をいくつか挙げてみた。三の酉の日はいわば節目の日であった。「美登利はかの日を始めにして生れかはりし様の身の振舞」を見せるようになる。その変わりようが、いままでの日常とぷつんと切断されたかのごとく語られているのが (a) ではないか。表町の友達との関係も、その日以降、途絶えていくのは共通するものの、その間の時の流れがゆるやかに進んでいくのは (b) であろう。⑤から⑧の差異は、それを示している。

大尾「或る霜の朝」の「明けの日」には、信如が僧侶になるため出発していくのだが、三の酉の日から、この「霜の朝」までの間に、美登利は汚されたと私は読んでいる。したがって、美登利が「水仙の作り花」の「清き姿」をなつかしく愛でるのは、汚される前の自分を重ねてのことだと読む。信如が「さし入れ置いた」と考え懐かしむとは、少なくとも美登利の意識に即せばありえない。だとすれば、ここまでの時間が(十五)章の三五郎の台詞にあるように、(a)「二三日」という表現よりも、(b)「最う近々」というゆるやかな流れを示す表現の方が、美登利にやさしいように思われる。⑨では、わが身に起こった「怪しい「現象」に、身体的なところで恥かしさを実感している (a) の美登利と、精神的な反応を表している (b) の美登利という違いが見られる。後者の方が、一段大人になっているようである。

- ⑤ (a) 友達淋しがりて誘ひに行けば、今に今にと空約束ばかり、
(b) 友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、
⑥ (a) さしもに仲善なりけれど正太と解けて物いふ事も無く

- (b) さしもに中よし成けれど正太〔を〕〈と〉さへに親しまず
- ⑦ (a) 筆やの店に手をどりの活発さは薬にしたくも見る事ならず成けり、
 (b) 筆やの店に〔出〕〈手〉踊の活発さは再び見るに難く成ける
- ⑧ (a) 表町は俄かに淋しく成りて
 (b) 表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて
- ⑨ (a) 此処しばらくの怪しき現象（ありさま）に我身をわが身と思はれず、唯何事も恥かしようのみあるに、
 (b) 此処しばらくの怪しの現象（さま）に我れを我れとも思はれず、唯何事も恥かしようのみ有けるに、
- ⑩ (a) 或る霜の朝水仙の造り花を格子門の際よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの処業（しわざ）と知る者なけれども、美登利は何故（なにゆえ）となくなつかしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿と愛でけるが、
 (b) 或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、

三の酉の日に美登利に起こったことが、「初潮」か「初店」（「水揚げ」）かという議論が、昭和60年以降近年まで続いた。いわゆる「たけくらべ」論争である。現在、その議論は「実体規定」できるものではないとして、沈静化している。しかし、「たけくらべ」を、美登利の意識を追って、そして〈語り手〉の語り方に着目して読んでいくと、小説内時間のなかで美登利が廓の女（娼妓）となったことは確実なのではないか。殊に、初出本文はそれを露骨に暗示しているようである（⑨（a））。再掲載本文は、そのことを前提としながらも、オブラートに包むように、やさしく曖昧な表現で語っているようである。すな

わち〈語り手〉の美登利への主観が感じられるのである。二つの稿本を比較すると、本文の統一感と完成度は再掲載本文に軍配があがると思われる。こうした本文の評価と、「成立順」は別の問題なのかも知れない。しかし、一人ひとりの研究者が「たけくらべ」を考える時にクリアしなければならない課題であることを、最後に繰り返して述べておきたい。

【付記】

本講演は、最新の研究動向をふまえてはいるものの、論旨は既に発表した拙論を基にしていることをお断りしておく。

戸松泉著『複数のテキストへ 樋口一葉と草稿研究』（2010・3、翰林書房）に以下に掲げた関係論文4本を収録。（ ）内は、初出。

*「たけくらべ」複数の本文（テキスト）——あるいは、「研究成果」としての『樋口一葉全集』のこと」（季刊『文学』1999冬号 平成11年・1、岩波書店）

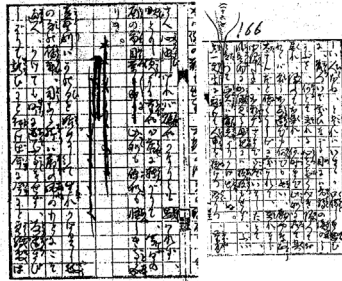
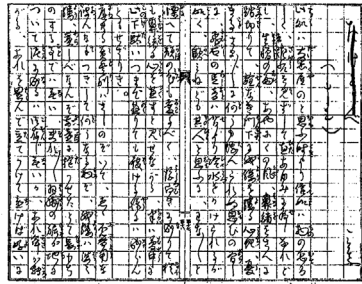
*「揺らめく「物語」——「たけくらべ」私解」（『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ——文学研究と国語教育の交差』（平成11・2、右文書院）

*「〈複数のテキスト〉——樋口一葉の草稿研究」（大妻女子大学 草稿テキスト研究所「報告集」『草稿とテキスト—日本近代文学を中心に』平成13・1）

*「樋口一葉——テキスト研究がめざすもの」（全国大学国語国文学会編『日本語日本文学の新しい視座』平成18・6、おうふう）

なお、初出稿本の閲覧・複写では、天理大学附属天理図書館および日本近代文学館のお世話になった。記して謝意を示します。

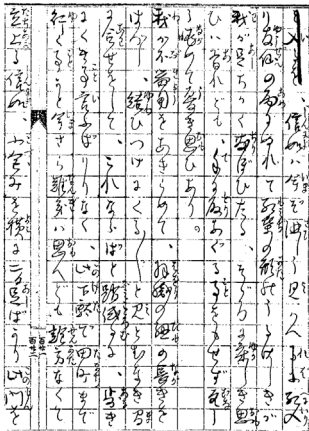
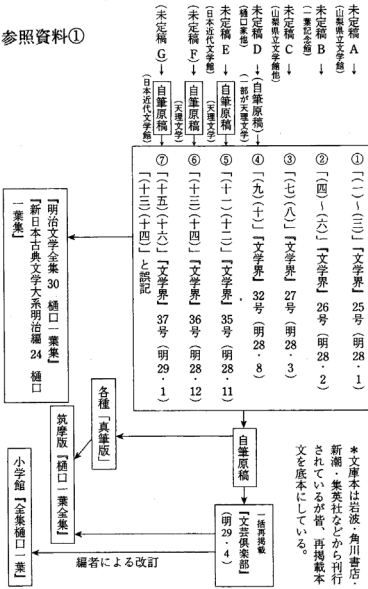
再掲載本文の原稿複製版は、何度も出版されてきたが、今回は最新の二玄社版『完全複製直筆たけくらべ 樋口一葉』を使用した。



(168)

余り女人とみたるほど思ひに迫れど、母親の呼しはく「なるを性しく、詮方なきに」足つ、飛石つたり増々とする。(一)「足る、何ぞいの未練くさい、思はく耻かし身をかへして、かたくと飛石を伝ひゆく」(二)は開版、(一)は加筆を示す

参照資料①



参照資料②

